

何も、覚えていませんが

Mika & Ryoya

あかし瑞穂

Mizubo Akashi

termity



エタニティ文庫

目次

何も、覚えていませんが

5

そして彼は、甘い嘘をつく

293

書き下ろし番外編

甘い監禁の罫

329

何も、覚えていませんが

プロローグ　　何も、覚えていませんでした」

誰かが私に囁く。甘い毒を含んだ低い声で。

『俺はお前を逃がさない』

「ん……」

眩しい程の光を感じ、私はゆっくりと目を開けた。

「まあ、目が覚めたんですね」

見覚えのない看護服姿の女性が私を覗き込んでいる。

身体を動かさそうとしたら、頭がズキズキと痛んだ。思わず眉を蹙めると、彼女から「まだ動いちちゃだめですよ、頭を打ったんですから」とやんわりたしなめられる。

頭をなるべく動かさないようにしながら辺りを見回すと、左手に刺さってる点滴のチューブが見えた。枕元近くのテーブルには、洗面用具や手鏡といった身の回り品と、綺麗な薔薇が生けられた花瓶が置いてある。

(ここつて……病室?)

看護師さん+点滴+痛む頭から考えると、私は入院中なんだろう。個室なのか、他に患者さんはいない。広い室内には、大型液晶テレビや高そうなソファセットまである。

痛みを堪えながら、私は看護師さんを見た。

「あの……ここは？」

「ここは、聖カトリーナ病院ですよ。目を覚まされて良かったです。先生をお呼びしますね」

お辞儀をして看護師さんが部屋から出ていく。

頭に手を当てると、包帯が巻かれてあった。上体を起こすと、頭が重く痛んだが、身体は動くみたいだ。

「聖カトリーナ病院って……あの？」

天才脳外科医がいるカトリック系の病院。敷地内にあるチャペルが有名で……つて、あれ？

ぞわりと背筋を襲う悪寒。とっさにテーブルの上の手鏡を手に取り、覗き込んだ。

肩に掛かるくらいに明るめの茶髪、茶色がかったまん丸の瞳——そこには、幼い印象のある女性が映っている。

「え……?」

全身に鳥肌が立った。おかしい。絶対におかしい。鏡に映ってる人物が、誰だか分からないなんて……

「……私……誰？」

——目が覚めたら、私は何も覚えていなかった。

どうやら私は、「外傷後健忘」かつ「全生活史健忘」らしい。つまり、怪我のせいでも自分自身の事を全部忘れちゃった状態だ。

「頭部を打った衝撃が原因でしようね。無理に思い出そうと焦らず、自然に思い出すのを待って下さい。それと、身体中に打撲の痣があるので、しばらくは安静が必要です」
「はあ」

看護師さんが呼んでくれた白衣姿のドクターは、端正な顔立ちに黒ぶち眼鏡を掛けている。いた。

うん、DSが似合いそう。きっと夜中のナースステーションで、純情な看護師さんを虐めたりするんだわ。お気に入りの子猫を虐めるドクター、ちよつといいかも。ついで上の空で話を聞いていたら、半ば呆れたような瞳が私を見ていた。

（しまった、つい妄想に浸ってしまった）

私はこほんと咳払いをして、ドクターに確認をした。

「えっと……私は、綾瀬未香、二十五歳。性別女性、で合ってますよね？」

「そうですよ」

「階段から落ちて頭を打って、この病院に運ばれてきた、と」

キラリとドクターの眼鏡が光った。手元のバインダーを捲る指は長く、器用そうだ。

「ええ。あなたはかなり不摂生な生活を送っていたようです。寝不足に栄養失調気味でしたよ。そんな状態で階段を駆け下りて足を踏み外した、と聞いています」

「私って、もしかして、問抜け……?」

「そうですね」

あ、ばつさりと切られた。やっぱりこのドクターはDSだ。

ちらと見た名札には、「斉藤卓」と書いてある。

（斉藤ドクターはDSだって、メモしたいのに書くものがない！）

内心悔しがっていると、斉藤ドクターは椅子を引いて立ち上がり、私を見てにっこりと笑った。

「まあ、後は婚約者さんに聞いて下さいね。もうすぐお見舞いにこられるそうですから」

「はあ？」

私の目は点になってるに違いない。

(今、なんて？ コンヤクシヤ？)

私はとっさに左手を見た。指輪はしていない。

「いずれ思い出すと思いますが、あなたには婚約者がいらつしやいます。怪我をしたあなたをここの救急に連れてこられたのも、この個室を手配されたのも、その方ですよ」

「婚約者さんが……」

全く思い出せない。私が首を傾げると、斉藤ドクターはええ、と頷いた。

「後はお二人で話し合って下さいね。では」

部屋を立ち去るスマートな後ろ姿に漂う胡散臭さ。DSなイケメンドクターに、謎の婚約者。

とても美味しくない？ 私の中で妄想が始まった。

「これは、お金を渡して医者を買収……いや、親戚の病院で色々隠してるパターン……それとも……」

右手の指がもぞもぞと動く。思い付いた事を書いておきたい。

(あれ？ どうして急に妄想したり、メモを取りたくなったりしたんだろう？)

と、疑問を感じながらも、まずは筆記用具が必要だとナースコールを押しした。

『どうされました？』

「あの……思い出した事を書き留めたいので、ノートとペンを買ってきてもらってもいいでしょうか？」

『分かりました、お持ちしますね』

「あ、そういえばお金は……」

お金の問題をすっかり忘れていた私がそう聞くと、『大丈夫ですよ、婚約者の方からお預かりしていますから』と返ってきた。

そうなんだ。気が利くなあ、覚えていない婚約者サンって。

「ふう」

色々と聞いて疲れたのかな。なんだか眠たい。私はリモコンでベッドを水平にして、横になった。

「メモが来たら、書き留めて……ふああ……」

大きな欠伸をした私は、そのまま瞼を閉じて、眠りに落ちた。

「身体全体がピンク色に染まって、息も荒い。この媚薬はよく効くだろう？」

「ううっ……ああんっ」
 媚薬のせいで腰が立たなくなつた私を彼がベッドに括りつけた。胸と太股の間にも、熱いどろっとした液体を擦りつけられ、かあつと身体が熱くなる。太股を擦り合わせても、疼く箇所には届かない。

（苦しい。苦しい。誰か助けて。この疼きを鎮めて）

くすくすと笑い声がした。彼の口角は上がり、瞳はギラギラと輝いている。その獷猛な熱で、この身体を貫いてほしい。

（私……変……）

「どこを触ってほしいのか、ちゃんと言えたら触ってやるよ」

「あうっ、あ、はあん」

腰をくねらせて吐息を漏らす。涙で潤んだ瞳で、彼を見上げた。

「わ、たし……の、ああんっ」

「わたしの？」

「胸、を触って……下さ、い……」

「胸のどこだ？」

どこまでも意地悪な彼は、まだ動かない。切羽詰まった私は、悲鳴のような声を出した。

「乳、首をつ……触って……っ！」

「——よくできました」

「ひゃああああん！」

きゅつと軽く先端を掴まれただけで、私は絶頂を迎えてしまった。

「これだけでもうイッたのか？ 淫乱だな、お前の身体は」

「はあっ、ああああっ……」

どろりと熱い欲望が、太股を伝って流れる。彼が、私の右胸に齧り付き、左胸の乳首を指でこねくり回し始めた。

「ああああっ、はああんっ、ああん！」

感じやすくなつた身体は、容易く彼に従う。乳首を吸われる感触も、指で擦られる感触も、そのどれもが気持ち良すぎて。

「まだまだ、これからだ」

小刻みに震える私の肌を舐めながら、彼が呟いた。

「俺なしでは生きていけないようにしてやる。俺が触れただけで、快楽に身も心も奪われてしまうように……な」

何を言われたのか理解できないまま、彼が与えてくれる極上の痺れに、私は喘ぎ声を漏らし続けたのだ……

ぱっと目を開けた。どくんどくと心臓が鳴り、手のひらに汗が滲んでくる。
 (何、今の……)

ふと枕元のテーブルを見ると、新品の青いB5サイズのノートと黒のボールペンが置いてあった。眠っている間に看護師さんが買ってきてきてくれたんだろう。

ベッドを起こしてペンを右手に持つと、なんだか凄く落ち着いた。私は必死に夢で見た事をノートに書き留めていく。

(媚薬……焦らされて感じて……堕ちる……?)

「あの人、誰……?」

低くて甘くて残酷な声だった。顔はよく見えなかったけど、背の高い男の人だったと思う。

書いたノートを読んでみると、まるで官能小説のようで、とても人に見せられる内容じゃない。

——コンコン

ノックの音に、私は急いでノートとペンを枕の下に隠した。慌てている間にドアが

開く。

こちらに近付いてくる人を見て、私は大きく目を見開いた。

すらりと背の高いその人は、灰色のスーツを着ていた。革靴とか時計とか、装飾品がやたらと高そうだ。それにモデルでもできるぐらい鼻筋の通った綺麗な顔は、動く彫刻みたい。黒髪がさらっとしていて、いいシャンプーを使ってそう。あんぐりと口を開けた私を見下ろし、彼はこう言った。

「大丈夫か、未香」

一瞬で鳥肌が立った。この、痺れるような甘く低い声は。

(夢で出てきた声と同じ……!?)

私はごくりと唾を呑み込み、恐る恐る聞く。

「あの……あなたは」

眉を顰めた彼は、こう告げた。

「俺の名前は城崎涼也——お前の婚約者だ」

こ・ん・や・く・しゃ? セレブそうなこのイケメンが? 私の?

「嘘でしょ?」

とっさに私の口から出た言葉は、それだった。

面と向かって嘘だと決めつけたのに、自称私の婚約者サンは動じない。椅子にどかつ

と腰を下ろして、彼は聞いてくる。

「何故そう思う？」

ううう、顔が近くなつた。何一つ見逃さないぞ、と言っている瞳。ここまで顔が良いつて、ある意味犯罪だと思ふ。じつと見つめられると、心臓が悪い！ 私は、やや目を逸らしながら、もぞもぞと言つた。

「だ、だって。私、どう考えても庶民だし」

そう。こんな豪勢な個室よりも、大部屋の方が落ち着くはずだ。お見舞いの花だって、薔薇は私には似合わない。

「でも、あなたはセレブだろうし」

「根拠は？」

私はきよとんと彼を見た。さつきから彼の表情は変わっていない。私を注意深く見つめる瞳は冷静だ。

「靴は手縫いのイタリア製っぽいし、時計はロレックスだし、スーツだって量販店物に見えないし。この病室を手配してくれたのも、あなただって聞いたから、お金持ちなんだろうなって……だから、そんなセレブなあなたと出会う事なんてなかったと思うんです。それに私、婚約指輪もしてないです」

まじまじと私を見ていた涼也さんは、突然「ぶっ！」と噴き出した。

「ふ、は、ははははははっ！」

「へ？」

なんで上半身曲げて、お腹抱えて大笑いしてるの、この人は。椅子から転がり落ちないだろうか。

しばらくして、涼也さんは「す……すまない、くくっ」と心底おかしそうに言つた。「記憶喪失になつたと聞いたから心配していたんだが、そういうところはまるで変わってないんだな。安心した」

「え、と、私ってこんな人でしたか？」

にしても、笑いすぎじゃなからうか。むむむと口を曲げた私に、涼也さんがやりと笑つた。

「ああ。すつとほけている割には、無駄に観察眼が鋭い。記憶をなくして不安がついてるんじゃないかと思つたのに、動じないところも相変わらずだ」

「……それは」

——私、何も覚えていないの。怖いわ……

——大丈夫だ、俺がついてる。思い出すまで傍にいるから。

——もっと抱き締めていて……離さないで……

——ああ……

(よもや、こーゆー展開を期待されていたんじゃない?! しまった、外した)

私は内心舌打ちした。女としての評価が下がり、代わりに珍獣度が上がった効果音が聞こえた気がする。

「すみません、期待に添えなくて」

そう謝ったら、また涼也さんが嘔き出した。むっとした私の頬を、身を乗り出した涼也さんが人差し指で軽く突く。

「そういうところが、相変わらず可愛いな、お前は」

どくと鳴る心臓の音。頬に熱が集まってくる。

(ううう、近付かないでほしい)

その心の叫びを察したのか、涼也さんは椅子に座り直して、にやにや笑いながら話を続けた。

「婚約指輪がなかったのは、まだ買ってないからだ。俺の仕事が一段落したら、一緒に買いにいこうって予定だった。俺がある程度金を持っているというのも正解。これでも一応社長だからな」

「あ、そんな感じでした」

社長と言われて納得した。どこか偉そうだし、命令し慣れてる感じがする。

「医師から話は聞いている。あまり情報を与えても混乱するだろうから、落ち着ける環境で養生したほうがいいと」

「はあ……」

のんびりするのがいいって、さっきも言われたよね。

「だから退院後は、俺が所有する別荘にお前を連れていく」

「はい!」

私は思わず目を見張った。別荘!? そんなもの持つてるの、この人!?

『俺なしでは生きていけないようにしてやる。俺が触れただけで、快樂に身も心も奪われてしまうように……な』

その時、夢の中の台詞がふいに頭を過った。瞬間、全身に悪寒が走る。

あれが涼也さんだったとしたら、別荘に連れていかれて、あんな事やこんな事を……?

私は恐る恐る言葉を続けた。

「あ、あの……私、仕事とかは」

「フリーランスで働いている。抱えていた仕事が終わったところだとお前が言っていた」

「じゃあ職場から連絡があるって事はないのか。」

「それなら、家族は……」

彼の瞳がすっと細くなった。腕を組んで、私を睨みながら言う。

「お前を引き取れる家族はいない」

「う……」

（家族は亡くしたのか、元々いなかったのか……。どちらにせよ伝手なしだ、どうしよう）

私はうむむむと考え込んだ。

家族なし。仕事もない。という事は、退院してから一人で暮らすのは難しいって事だ。せめて記憶が戻るまでは、誰かの——というよりこの人のお世話になるのが一番いい。という事は分かるのだけれど。

（あの夢……）

警報音が頭の中で鳴り響く。あの声はこの人の声だった。もっと甘くて残酷な響きだったけど、単なる偶然にしては、でき過ぎてる……

「うにゃっ!」

むにと左頬を抓られたかと思ったら、覆い被さってきた涼也さんの顔が、数センチの距離にまで近付く。ち、近い……っ!

「お前は余計な事を考えるな。身体を治す事を第一にしろ。大体、お前が考え込むと口クナ事がない」

「う、あ、の」

心臓のバクバクという音が聞こえる。頬が熱くて堪らない。

全身の産毛が逆立つようなこの感覚を、どう表現すればいいんだろう。何も言えない私を見た涼也さんが、満足気に微笑んだ。

「とにかく、お前は何も心配しなくていい。婚約者である俺が、お前の面倒をみる」
長い指が私の頬をすると撫でた。

「また来る。ちゃんと養生しろよ?」

指の動きも、にやりと笑う口元も、無駄にエロチックなんですけど、この人!?

「う、は、はい——っ!」

柔らかな感触が唇の上を掠めた。固まったままの私の唇を、優しく啄むように動く涼也さんの唇。下唇を軽く噛まれて、思わず身体が揺れた。

（え!? えええ!? 私……っ!?!）

軽いリップ音を立てて、涼也さんの唇が離れた。口端を上げて妖艶に微笑む涼也さん

がエロ過ぎる。

「な！ ななな、何してるんですかーっ！」

上掛けを引き上げて顔を隠した私とは対照的に、涼也さんは何事もなかったように席を立った。

「婚約者なんだから、これぐらい当たり前だろう。言っておくが、怪我人だから本気は出さないぞ」

本気出してないって、そういう問題なの！

「そんな事言われても、私はあなたを覚えてないんですから！」

「……へえ。覚えていない、ねえ」

涼也さんの周囲の気温が一気に下がった気がする。もしかして、私、地雷を踏んだのかも……上掛けをぐっと握り締める私の手に、大きな手が重なった。その温かさに、心が絆される——事はなく、ますます背筋が寒くなっただけだった。涼也さんの笑顔は、綺麗だけど黒すぎてコワイ。

「なら、覚えるんだな。これから何度でもやるつもりだからな」

「ふえ!?」

「やる」の発音に不穏な響きを感じたのは気のせい？ 引き攣った表情の私を見て不敵に笑った涼也さんは、最後にデコピンをして病室を出ていった。後ろ姿までカッコい

いってどういう事だろう。

「ううう……疲れた……」

身体から力が抜けた私は、ずるずるとベッドの背もたれに身を預けた。

(何か、いいようにされた気がする)

結局のところ、退院したら涼也さんの別荘に行く事が決まってしまった。衣食住には不自由しなさそうだけど、でも。

(うーん……)

夢の中のあの人は、本当に涼也さんなんだろうか。同じ声だったし、色っぽかったし。でも、あんな事する人なの……？

「いたた……」

考えすぎて頭が痛くなってきた。私は手元にあったりモコンに手を伸ばし、ゆっくりとベッドの頭を下げた。

「とりあえず、身体を治す事が先決だよね」

私は素直に上掛けに潜り込み、そのまま目を閉じて力を抜いた。まだ回復しきっていない身体は、すぐに私を夢の世界へ連れて行ってしまったのだった。

1 別荘行きはサスペンスエロドラマの始まりでした

結局、退院するのに二週間ぐらい掛かった。おかげで身体中の痣はほとんど分からなくなり、頭の怪我也深傷ではなかったため包帯は取る事ができた。けれど、記憶は戻らないままだった。

この間みたいな変な夢は時折見えて、全部ノートに書き溜めているけれど、何故か官能的な夢ばかり。さすがに誰にも相談できず、ただ書いてあるだけになってしまった。涼也さんは、ほぼ毎日お見舞いに来てくれて、怪我の具合やリハビリの様子を聞いてくる。無理に追ったりしない彼は、穏やかな感じではあったが、時折ちらつく腹黒さに寒々しい思いをした。別荘以外に行くところはないのか、何度か食い下がってみたけれど、あつさり却下。納得いかないまま、退院の日を迎えた。

そうそう、怪我が治るまではほとんど寝たきりだったから、少しずつ運動してリハビリするように、とドSな斉藤ドクターに言われている。確かに身体がなまったのか、起きていると疲れやすい。

退院の日、濃いシルバーのランドローバーで迎えに来てくれた涼也さんは、さつさと手続きを済ませ、わずかな荷物（病院で買った日用品）を持った私を乗せて、手際良く別荘へ向かう。彼に任せきりだった私は、先生達にありがとうございました、とお礼を伝えただけだった。

「うわあ……」

車の窓から見えるのは、濃い緑色の森ばかりだ。砂利道を走る車はちよつとガタガタして、座席が小刻みに揺れている。

午後一番に病院を出てから、もう一時間以上は経つるかなあ。コンビニもない、本当に山の奥だ。

私は自分を見下ろした。薄手のセーターにジーンズ、靴下に靴、ジャケット、それに下着に至るまで全部差し入れた。「凄くお似合いですよ、さすがは婚約者さんですね！」と理学療法士さんに言われたけれど、なんか腑に落ちない。どうしてサイズが全部合っているのかは、考えないでおこう、うん。

私はちらと隣の運転席を見た。サングラスを掛けた涼也さんは、前を向いて運転に集中している。今日の彼は、革ジャンにジーンズというラフな格好だけど、やっぱり雑誌に出てくるモデルみたいに決まっていた。

まだまだ山の中は寒いから、と身体に掛けられたフリースの肩掛けの下、私はぎゅっ

と身を縮こまらせていた。

(この人が、あんな事……?)

——今朝の夢も強烈でしたよ、はい。

「ふっ……く、えっえっ……」

半泣きになって呻きながらベッドに転がる私。後ろ手に嵌められた手錠と、赤い紐のせいで身体が動かない。お腹の辺りにできた六角形が亀甲縛りの特徴。身体を揺すると紐が擦れるが、喰い込んで痛みを感じるまではいかない、絶妙な縛り加減だった。

「裸にひん剥いてから縛れば良かった。服を脱がすのが面倒になったな」

彼が押し掛かってきて、紐のせいで一層盛り上がった胸を掴む。彼の瞳が妖しく光った気がした。

「ああ、いいな。身動きが取れないお前を触るのは気持ちいい」

「あうっ」

強めに胸を揉まれて、思わず背中を反らすと、紐の結び目がきゅつと擦れた。

「——」

「はう、んんんんーっ」

呼び掛けられたと同時に、奪われた唇から彼の息と舌が入り込んできた。彼の息も、唇も、舌も熱い。舌と舌が絡み合ういやらしい水音。食むように動く薄い唇。口の中に「雄」の匂いが充満した。自分の身体に、その匂いと熱が共に沁み込んでいく。どろりと濃密な液体の中に沈んでいくような、そんな感覚が私を襲った。甘くて激しくてどこか後ろめたい。

まるで唇と舌が所有権を主張しているようで、逆らう事ができない。

「はあ、や、あ」

ゆっくりと唇を離された時には、すっかり息が上がっていた。彼の息も荒い。煮えたりぎるような瞳が私を捉えている。ほんの少しだけ、彼の口端が上がった。笑う、というには壮絶すぎる表情。

何かを言おうと彼が口を開いた。

「——」

衝撃的な事を言われたと思っただころで、目が覚めた。そしてとっさに手首を確認す

る。だって、思いきり身を振ったんだもの、痕が付いていたらどうしようと思ったのだ。綺麗な手首を見てほっとした次の瞬間、枕元に隠していたノートを開き、一気にあのシーンを書いてしまった。

(このノート、本当に誰にも見せられない……ううう)

ノートとペンだけは、青いリング柄のポーチ(これも買ってもらったものだけ)に入れて、しっかりと胸に抱き締めていた。どう読んでも、官能小説なんだから。しかも、顔が見えないから断定はできないけれど、声は涼也さんだったし。

もし本当に涼也さんだったとしたら、寝る度にあんな夢を見る理由は――

1) 私がエロいから

2) 過去の事を思い出しているから

3) 実は未来予知だから

のうちのどれかか。だとしたら、まだ2番がマシかなあとつい思ってしまふ。

(いやいやいや、私苛められてるからね!?)

暴力振るわれている訳じゃないけれど、手錠掛けられて、亀甲縛りされて、あんな事やこんな事されて……それが過去の事だなんて……

(でも心底嫌いじゃ……なかったのよねえ……)

そう、酷い事をされているのに、夢の中の私は彼を大嫌いという訳でもなかった。逃

げたいとは思ったけれど、顔も見たくない程じゃない。何なんだろう、このなんとも表現しがたい感覚は。縛られてこんな事を思うなんて、もしかして私、M気質があったの？

「ふう……」

考え過ぎて溜息を漏らすと、涼也さんがこちらを見た。

「まだ掛かるから、しばらく寝ておけ。退院したばかりで体力ないだろう」

「……はい」

確かに身体はだるい。早く体力を戻すために、リハビリしない……

「……あふ」

堪らず大きな欠伸を漏らした私は、そのまま車の振動に身を委ねた。

「んっ……」

柔らかくて温かい感触が、唇の中に侵入してきた。唇が擦れる度に、身体に熱が溜まっていく。舌を吸われて背中が震えた。

(また……夢……)

「んは、ん……んんっ!」

むにっ胸を掴まれた感触がして、私は目を開ける。

(ゆっ、夢じゃないっ！)
 重ねられた唇が熱くて強引で、私は一瞬固まってしまったが、すぐに我に返った。
 (ななな、何してるのよ、この人ーっ！)
 「んんんんんんーっ！」

ドンドンと涼也さんの胸を叩く。なのに全然動く気配がない。セーターの裾から手が
 忍び込もうとしているのを感じ、なりふり構っていられなくなった。

どすつと鈍い音がして、涼也さんが顔を歪める。肘鉄を鳩尾に決めてやったわ！

「なっ、何してるんですかーっ！」

逃げるように車の窓に張り付くと、涼也さんはやれやれと頭を振った。

「婚約者が色っぽくうたた寝してたら、襲うのは当たり前だろうが」

いつの間にサングラスを外したのか、目付きは肉食獣そのものだった。また顔を寄せ
 てきた涼也さんを、必死に手で押しつける。

「当たり前じゃないですっ！ 大体、色っぽいつて！」

くすつと笑う涼也さんの口元をつい見てしまう。ううう、そっちの方が色っぽいじゃ
 ない！

「熱い吐息を漏らして、頬が少し赤くなって……おまけにくねくねと身を振られたらな。
 喜んで据え膳食うぞ、俺は」

「んきやあああーっ！」

またあんな夢を見たの、私!? かつと頬が熱くなる。そんな私を見る涼也さんの
 瞳は、完全に夢の中の人の視線と一緒だった。涼也さんの大きな手が、火照った私の頬
 を撫でる。

「婚約者なんだから、これくらい我慢しろ」

(はっ、もしかして!?)

私は目を見開いた。

「もしかして、『記憶はなくなったけど、身体は覚えてるはずだ』っていう、あの展開
 をしようとしてますっ!？」

そうだ、記憶喪失の定番パターン！ 覚えてないのに、指や唇に翻弄されて、身体が
 蕩けて堕ちていくという……あれなの!? それで据え膳食べちゃうつもりなの!?

「は」

涼也さんは絶句し、一瞬固まった後、「ふははっ、はははははははっ！」と大笑いし始
 めた。

「おまつ……お前、どんな思考回路を……くくっ、はははははははは！」

笑う涼也さんを殴りたくなった私は悪くない。むうと頬を膨らませるも、涼也さんは
 笑い続けたままだった。

「お前さえ良ければ、『身体は覚えてるはずだ』をやってもいいが？」

「激しく遠慮させて頂きますっ！」

にやにや笑いの涼也さんにきっぱりと拒絶を伝えると、彼はあっさりと身を引いた。

「まあ、お楽しみは後に取っておこう……着いてるぞ」

「へ」

涼也さんへの応戦に必死で、車が止まっていた事に全然気が付かなかった。涼也さんが先に車を降り、助手席に回ってきてドアを開けてくれる。車高の高いランドローバーから、涼也さんに抱き降ろしてもらおう。砂利の上に降ろされた私は目を丸くし、「わあっ……！」と歓声を上げた。

目の前に建っていたのは、赤い三角屋根の別荘だった。白い壁に縦に長い窓があり、イギリス風ホテルみたい。周囲の針葉樹の森に違和感なく溶け込んでいる。冬には雪が積もってさぞ綺麗だろう。正面には、丸太を半分に切って造られた手すり付きの階段があり、その上には精巧な彫刻が施された木のドアがあった。

「これ……密室殺人によく出てくる別荘……！」

雪で閉じ込められた男女七人。携帯の電波も届かず、電話線も雪の重みで切れてしまった。そんな中、一人ずつ殺されていって……

そう、そんな推理ドラマに出てくる別荘そのものじゃない！

(後でメモしよっと)

ポーチを握り締めていた私の後ろから、くくくつと笑う声が聞こえる。振り向くと、私の荷物を持った涼也さんがすぐ後ろにいた。

「前も同じ事を言っていたな。連続殺人の現場にピツタリだと」

「うっ」

どうやら、記憶を失う前の私もこんな調子だったらしい。記憶喪失になったからって、劇的に性格は変わったりしないのよね、と妙に安心した。

「ほら早く中に入れ。春が近付いているとはいえ、この辺りはまだ肌寒いからな」

「はい」

そう促されて、階段を上る。玄関にたどりつくと、涼也さんがチャイムのボタンを押した。

「はい——まあ、お帰りなさいませ！」

すぐにドアを開けてくれたのは、にこにここと笑う、私より小柄な初老の女性だった。白いエプロンにジャージのズボンという姿を見ると、別荘の管理人さんだろうか。

「ただいま。こちらが俺の婚約者の綾瀬未香だ。よろしく頼むよ」

「うわ！ 凄いい好青年みたいだっ！」

落ち着いていて優しい声。黒さのない笑顔。これぞ正しく、ロマンス小説の正統派ヒーローだ。涼也さんの変わり身つぷりにびっくりしていると、女性は「まあ、あなたが！」と私の前に来た。私の手を握り締める彼女の手は、働きの手だった。

「ようこそおいで下さいました。私はこの管理を任されております、井口美恵子と申します。事故の事は旦那様から聞いておりますよ。大変な目に遭われたとか……。ここなら、落ち着いて療養できますので、どうぞごゆっくり滞在して下さいね」

「美恵子さんは看護師の資格も持つてる。体調の事で不安があったら、すぐ彼女に相談してくれ」

看護師。うん、そんな感じ。笑顔が温かくて、責任感が強そうで、きつと優秀な看護師さんだったんだろうなあ。

あ、美恵子さんがここにいてるって事は、涼也さんと二人きりじゃないんだ！ やった！

「ありがとうございます、お手数をお掛けする事もあると思いますが、よろしくお願いいたします」

私が素直に感謝の気持ちをお口にすると、美恵子さんの目が、うるうると潤んだ。

「こんなに可愛らしくて素敵なお嬢さんが……。さあ、早く中へどうぞ。暖めておきま

したからね」

私は美恵子さんに勧められるまま、別荘の中に足を踏み入れた。ふわっと暖かい空気が私を包む。

「うわ……」

内側も推理ドラマに出てくる別荘そのものだった。

広い玄関から中に進むと、天井が吹き抜けになっている広間があった。二十畳以上ありそうな広間の真ん中には、大きなブリキ製のストーブがでんと設えられており、赤とオレンジ色の火が小さな窓から見えている。他にも大きな木のテーブルや、ビリヤード台、お酒の瓶が並んだ戸棚などがあつた。

右手にある二階への階段は少しカーブしていて、犯人が上から下りて来そうな雰囲気だ。容疑者全員をこの場に集めたイケメン探偵が、「犯人はこいつだ！」と指差す場面が目に見えんだ。

「さあ、お部屋にご案内いたしますね。どうぞこちらへ」

美恵子さんについて歩きながら、私はきよきよと辺りを見回していた。涼也さんは後ろを黙ってついてきている。

広間の左側のドアから廊下に出て、玄関から見て奥へ進む。右の広間側の壁には縦長のはめ込み窓があり、左側にはドアがいくつつか並んでいた。ドアの中央に彫られている

模様は一つ一つ異なっている。きつと、「○○の間」とかそれぞれに名前が付いているんだらう。こんなに手が掛かった内装をしてるなんて、涼也さん本当にお金持ちなんだ。「こちらですよ、どうぞ」

美恵子さんに連れてこられたのは、一番奥のドアの前だった。ドアの彫刻は菱形の中に羽のモチーフ。突き当たりのドアは他の部屋とは違い、ガラスの引き戸になっている。「引き戸の向こうは浴場と地下に下りる階段になっています。ここは天然温泉を引いているんですよ。まだ身体が辛いだろうから、温泉に一番近い部屋にと旦那様が」

「え」
後ろを振り返ると、涼也さんがゆっくりと頷いた。

「地下にはプールがあるから、どちらも好きに使っていい。筋力のリハビリにはもってこいだろ？ ただし、プールには一人で入るなよ。必ず誰かと一緒に入る事。分かったな？」

「は、はい。ありがとうございます」

確かに、衰えた体力のまま一人でプールは危険すぎる。本当に、よく気が回る人だなあ。

「ほら、部屋に入れ」

涼也さんに言われて、私はドアをゆっくりと開けた。小花柄が散っているベージュ色

の壁紙と、大きな窓に掛けられた明るいグリーンのカートンが目に入った。

「うわあ」

私は口をぽかんと開けたまま、部屋を見回した。外国の貴族の部屋とでもいうのか、アンティークっぽい雰囲気がある。部屋の中央には小さな白い丸テーブルに椅子が二脚。椅子の曲線がロココ調っぽい。右側の壁際にはふかふかそうなベッドが置かれ、反対側の壁にはクローゼット兼物入れが備わっている。その隣にあるドアの向こうがユニット式の洗面所だ、と美恵子さんが説明してくれた。

涼也さんがテーブルの上に私の荷物を置く。

「移動で疲れただろうから、しばらく休んでいろ。着替えはそのクローゼットに用意してあるから適当に選べばいい。俺は書斎で仕事をしている。何かあったら、内線電話があるからそれに掛けてこい」

「わ、分かりました」

涼也さんは、踵を返してさっさと部屋を出て行ってしまった。美恵子さんは、そんな涼也さんを見て、苦笑する。

「お嬢様をこちらにお迎えする、という事で、かなりお仕事を前倒しされたそうですよ？ ここからメールやお電話で指示するだけで済むようにして、一ヶ月休暇を取られたいんです。あの仕事中毒の旦那様がそんな事をなさるなんて……余程お嬢様の事が大切

「なんですわね」

「一ヶ月休暇!? そんなロングバケーションを取らなくても、美恵子さんか他の誰かがいてくれたらいいのに!?」と思っただけで、さらさらした瞳を向けてくる美恵子さんにそんな事を言えるはずもなく……

「では、ごゆっくりなさって下さいね。夕食の支度(したく)が整いましたら、お声掛けしますので」

「……ありがとうございます」

美恵子さんがいなくなった後、私はボスンとベッドにダイブした。ふっかふかの羽毛布団だわ、これ。

「ふう……」

やっぱり山道はかなり応え(こた)たらしい。横になっただけで、強烈な睡魔(すいま)が私を襲(おそ)ってきただの。私は上掛け(かみかけ)に潜り込み、あっさり意識を手放した。

「……様、お嬢様?」

「う、ん……?」

目を開けると、心配そうな美恵子さんの顔があった。私はゆっくりと上半身を起こす。

「美恵子、さん?」

「夕食の支度(したく)が整いましたよ」

ああ、もうそんな時間なんだ。ちらと窓の方を見ると、カーテンの向こう側は暗そうだった。私は抱き締めたまま眠ってしまったポーチを枕元に置く。

「あれ?」

ふと右手で首元を擦(こす)ると、肌がしっとりとしている。

「寝汗(ねあせ)を搔(か)かれていますね、お着替えならこちらに」

美恵子さんがさっと立ち上がってクローゼットの引き戸を開くと、ずらりとハンガーに掛けられた衣服が見えた。その下にある、箆(たんす)のような引き出しも。

(何着あるの、これ!?)

「あの、この着替えて」

「ええ、旦那様が全て選ばれたんですよ。そうですね、夕食の時ぐらいいはおめかししてはどうですか?」

(どう見ても、高そうなんです。いくら使ったのよ、あの人は!)

と美恵子さんには言えなかった私は、「あの、良く分からないのでオマカセシマス……」と頭を下げる事しかできなかった。

途端(とたん)に、美恵子さんの表情が明るくなる。

「まあまあ、こんなおばさんにお任せだなんて。よろしいんですか?」

「はい。私まーたくセンスないと思いますので」
 何故か確信が持てる。私が、東京コレクションなんかでウォーキングしていたモデルである可能性はない。

「分かりました。じゃあ、このお色とかお似合いだと思えますよ?」

「……ハイ」

自分には見合わない高級そうなワンピースを見て、はあと溜息をついた私だった。

「ここが食堂……」

玄関から見て、広間の奥が食堂だった。私の部屋からだど、玄関に向かう途中にある、左側のドアから入れた。

しかし食堂も広い。外に接した窓はないけれど、代わりに奥一面の壁は、外国の風景が描かれた壁画になっている。その前にはステージみたいな台があって、小さなピアノが置かれていた。お金持ちの考える事は分からない。

食堂の真ん中に置いてある白い四角いテーブルは、パーティー会場でしか見ない大きさで、十人以上は一緒に座れそう。高い天井から吊るされているのは、ウエディングケーキみたいな形をした金色のシャンデリア。あれがガシャンと落ちて、事件が起こる……みたいなドラマのワンシーンが頭の中に描かれる。

「さあ、どうぞ」

美恵子さんが引いてくれた椅子は、涼也さんに向かい合う席だ。私が腰掛けると、「では、お料理をお持ちしますね」とキッチンの方へ消えた。

「似合ってるな」

涼也さんがつこりと笑う。私は目を逸らして、もごもごと礼を言った。

「あ、ありがとうゴザイマス」

私が着ているのは、薄い黄色のシンプルなワンピース。袖丈は八分ぐらいの前開きタイプで、包みボタンがずらりと並んでいる。ウエスト部分は紐を通して後ろでリボン結びをしていた。着心地はさらりとしているし、柔らかいし、いい生地を使っているのだろう。

対する涼也さんも着替えたらしく、カーキ色のゆったりめのスラックスに、生成り色をしたVネックの薄手のセーターを着ていた。正装じゃなくて良かった、本当。

「まだ身体が辛いだろうから、前開きの服をメインに買ったんだ。着替えが楽だろう」

「え」

私が目を丸くすると、涼也さんがくつくくと可笑しそうに笑う。

「というのは言い訳だ。前開きの方が、いざという時に脱がせやすいだろう?」

「ふええ!?!」

ほん！と頭が爆発した音が聞こえた。涼也さんは「冗談だ、冗談」とお腹を抱えて大笑いしている。

（そ、そーゆー際どい冗談は止めてよ！）

ただでさえあんな夢を見ていて、居心地が悪いっていうのに！顔だけじゃなく、身体全体がゆだるように熱くなってきた。

「あら、どうなさいました？ お顔が少し赤いようですが……」

銀色のカー트에料理を載せてやってきた美恵子さんが、私の顔を見て言った。すると涼也さんがそつなく答える。

「少し暖房が効きすぎでいたみたいだな。温度を下げたから大丈夫だろう」

暖房のせいじゃなくて、あなたのせいなんですけど。悔しそうに歯ぎしりをする私の横で、美恵子さんは手際よく二人分の料理を並べていく。

本来ならフランス料理が載っているようなカートだったけれど、私の目の前に置かれたのは、ほかほかと湯気の立つすいとんだった。野菜がたっぷり入っていて美味しそうな匂いがする。

「退院したばかりですからね、消化のよいものにしました」

「ありがとうございます、美恵子さん。いただきます」

手を合わせて、スプーンで口に運ぶ。じんわりと温かくなる味だ。

対する涼也さんはがつつり肉！ だった。分厚いステーキにサラダ。ナイフとフォークで綺麗に肉をカットして食べている。

この人、肉食獣みたいだけど食べ方は綺麗だよ。と、見惚れていたら、涼也さんと目が合った。

「どうした？」

美恵子さんの前では好青年の顔だ。今もいやらしさとか意地悪さとか微塵も感じられない表情をしている。いつもこんな感じだったら、ヒーローになれるのに。

「な、なんでもアリマセン」

私は、ふうふうはふはふと、温かいすいとんを食べる事に専念したのだった。

「美味しかったです、ご馳走様でした」

そう言うと、美恵子さんは嬉しそうに笑い、食器類をカー트에片付ける。それが終わった頃、涼也さんが美恵子さんに話し掛けた。

「これで帰っていいから。後は俺が食器洗い機に入れておく。こんな時間までご苦労だったな」

美恵子さんがまあという顔をした。

「よろしいんですか、旦那様。夫にも言ってきましたし、今日くらいはこちらに泊まり

込みでも……」

「構わない。未香の調子もいよいよだし、何かあれば俺が対処するから。旦那さんの体調が気になるんだろう？」

（ちよつと待って。美恵子さんって、ここに住んでる訳じゃないの!?)

さあつと血の気が引いた。二人きりじゃないと思つてたのに！ こんな野獣みたいな人と殺人現場(?)で二人きりなんて！

「ですが……」

「いんだよ、美恵子さん。娘さんが来られるのは昼間だけだろう。夜は美恵子さんが傍にいてあげた方がいい」

話を聞くと、どうやら美恵子さんの旦那さんは、数ヶ月前に大怪我をして自宅療養中だそう。日中は娘さんが来てくれるらしいけれど、夜間は美恵子さんがお世話をしているらしい。本当は美恵子さんが一日中付き添えればいいんだろうけど、それだと収入がなくなってしまう。だから、ここの管理人をしていた旦那さんに代わって働いているとか。

「ありがとうございます、旦那様。何かから何まで世話をして下さい……」

美恵子さんの瞳が潤んでる。一緒にいてほしいとは言いだせない雰囲気……。私はガクツツとうな垂れた。

「では、お言葉に甘えて。最後にお嬢様をお風呂場にご案内しますね？」

「ああ、頼む。未香を案内したら帰っていいよ」

「ありがとうございます。では、お嬢様。こちらへどうぞ」

「は、はい」

私はそそくさと席を立ち、美恵子さんについて食堂を後にした。

私と美恵子さんは一度部屋に戻り、着替えを手にして、廊下の突き当たりにある引き戸の中に入った。

「こちらの備品は、好きにお使い下さいね。脱いだ洋服は、そちらに入れて頂ければ、明日洗濯いたしますので」

「旅館みたいです……」

脱衣所に設置された白い棚には、籐の籠が綺麗に並んでいた。バスタオルや手ぬぐいタオルも折りたたまれて、棚の一つに積まれている。棚の前には、ホテルでよく見る大きな布製のカーブがあり、ここに脱いだ服を入れるらしい。反対側の壁には大きな鏡があり、洗面台が三つ、すぐ横にドライヤーやコスメグッズなんかも置いてある。

「プールの後、皆さんで入られる事もありますからね、大きめに造られているそうですよ」

「なるほど。もう大丈夫です、美恵子さん。ありがとうございました」

私がそう言うのと、美恵子さんは「気分が悪くなられたら、浴室内にもこれと同じボタンがありますから、それを押して下さいね」と木の壁を指差した。そこには、非常ベルのボタンにしか見えない、大きな赤いボタンがある。

「では、失礼いたしますね。お湯に浸かりたいでしょうが、今日はシャワーだけにしておいて下さいませ?」

「はい、分かりました」

お辞儀をして美恵子さんが出ていった後、籠の一つに着替えを入れ、前開きボタンをぶちぶちと外した。確かに後ろのファスナーより楽だけれど、さっきの会話のせいで下心を感じ、落ち着かない。

脱いだ服をカートに入れ、大きめの手ぬぐいタオルを身体に巻いて、浴室の引き戸を開けた。一歩中に入った私は、「あれ?」と首を傾げる。

紺色のタイルが敷き詰められた大きな浴室には、三人ぐらいは優に入れそうな大きさの夜空色のバスタブがある。その前には大きな鏡と、洗面器に腰かけが置かれている。シャワーの金色の縁取りが印象的だ。

(見た事ある……?)

そう思った瞬間、いきなり頭の中にイメージが浮かんだ。白い裸体を後ろから責められている女の姿だった。

「ひあつ……!」

甘く淫らな声が響く。湯気の中、上気した肌はピンク色に染まっていた。

紺色のタイルが敷き詰められた浴室内の、夜空の色をしたバスタブの中に私達はいる。正確には、バスタブのへりを両手で掴み、お尻を突き出すポーズを取っている私の背後から、彼が手を伸ばしていた。

長い指が私の肌を弄ぶ度に、身体に力が入ってしまう。太股付近の水面がちやぷんと揺れた。

「ああ、お前の肌は気持ちがいいな。まるで吸盤のように吸いついてくる」

「ああんっ、やめてっ」

「やめろ?」

くすくすと笑いながら、彼の指が尖りきった胸の先端を引っ張った。

「ああああん!」

「こんなに感じているくせに。ゆらゆらと腰を揺らして俺を誘っているぞ。ほら、前を

見てみろよ」

「いやあつ」

大きな鏡には、後ろから私の胸と熱く濡れた箇所かしよに触れている彼と、そんな彼にほんろう翻弄ほんろうされている私の姿が映っている。

恥ちずかしくて、きゅつと目を閉じた。

「お前まへがよがる姿は最高に可愛い」

「いやあ、言わないでっ」

背中に感じる張りのある筋肉質な肌。そして、私の太股ふとももの間には、硬くそそり立ったモノが挟はさまっていた。彼の背中に当たったシャワーの水すい滴たみが、私の身体にも流れてくる。その金色の縁取りのシャワーをさつきまでひた襷ひたに当てられ、彼が満足するまで責められていたのだった。

「そろそろこちらこちらも蕩とろけてきたようだな。俺おれが擦こする度に、いやらしい汁あぶが溢あふれてくる」

「ああああつ！」

太股ふとももの間に侵入しんぱんしてきた手に敏感びんかんになった豆を親指びんかんと人差し指つまで抓つままれた私は、思わず悲鳴ひめいを上げて仰あげ反そった。

「ナカが寂ひましいだろう？ 俺おれを誘ううように蠢うごめている」

「ああ、あああああん」

恥ちずかしくて死しにそう。お湯お湯の中でなかつたら、きつと立たっていられない。襷ひたを擦こする肉にくの塊かたまりも、敏感びんかんな豆をいじくり回まわす指ゆびも、腰こしが碎くだけそうな程ほどの快楽くわいらくを私わたしに与あたえていた。

「俺おれをほしいと言いえ」

首筋くびすぢから背中せなかを熱あつい舌しほが舐なめる。身体からだがびくと震ふるえた。

「あ、はあんっ」

「ほら、この肉棒にくぼうを入れてほしいと。かき混ぜてぐちゃぐちゃにしてほしいと言いえよ」
自分の奥おくがざわりと揺ゆれる。襷ひたが締ひまり、早く熱あついモノを啞ふえたいと訴こえる。

逆さからえない。この焦こがれるような欲望よぼうから、逃にげられない。

「ほ、し……い……の」

「何が？」

彼の意地悪いぢあくい声こゑが耳元みみもとで囁ささやく。

ちやんと言いわないと許ゆるしてもらえない。私は半分泣なみき声こゑで言いった。

「あなたの、熱あついのが、私の……ココに、ほしいの……」

「よく言いえたな。いい子こにはご褒美ほうびをやるよ」

そう言いうと、彼の両手りょうてが私わたしのお尻おしりを掴つかんだ。そして――

「ななな、何今の!？」

かっとなが熱くなった。私はくらくらする頭を抱えながら、浴室の中をもう一度見回した。紺色のタイルも、夜空の色のバスタブも、高級感あふれる金縁のシャワーも、やっぱり見覚えがある。

「まさか、ここで……?」

バスタブに近付いた私はタオルを外して右手に持ち、中に入った。ちゃぶん、とちゅうどよい温度のお湯が揺れる。二人一緒に入るのに問題のない大きさだ。

「えーっと、こうやってへりを持って、前かがみになって、顔を上げる……と」

鏡に映る自分の姿は、さっきのイメージと同じ格好になった。たゆんと下を向いたバスタブが揺れる。違うのは、後ろに見えた筋肉質な身体がない事だけだ。

「うわ……へりの厚さまで一緒……」

両手でへりを掴んだ感触も、鏡までの距離感も、全て同じ。という事は、ここであんな事やこんな事があったの!？」

「って事は、やっぱりあの男の人って……涼也さん?」

だって、同じ声だし、ここの持ち主だし。身体は見た事ないから、あそこまで筋肉質

なのかどうか分からないけれど、背の高さは同じくらいだった。頭に血が上りそう。

(あ、だめだ。考えすぎて目まいが)

外に出ようとして、慌ててバスタブを跨ぐ。右足をタイルに下ろしたはずが、ずるりと前に滑ってしまった。

「んきゃああああああっ!」

ずでん! と派手に転び、左半身を床にぶつける。

ううう、右手に持ってたタオルが下に垂れてて、それを踏んじやった……

「いたあ……」

思い切り左腰の辺りを打った。お尻までじんじんと痛む。起き上がろうと上半身を起こしたけれど、かなり痛くて立ち上がる事ができない。

「右足首も捻った気がする……いたた」

なんとか横座りの姿勢になり、左腰を擦っていると、がらりと戸が開いた。

「おい、大丈夫か?」

「へ」

私の思考回路が停止した。湯気の向こうに見えるのは、ストラックスをはいた長い脚。視線を上にあげていくと、そこにいたのは。

(りよ、涼也さんっ!?)